

皮膚真菌症に対するパリオチン液の効果

安田 利顕・吉田公乃利

関東通信病院皮膚科

(昭和 34 年 1 月 20 日受付)

最近抗糸状菌剤の研究が盛になり、それらによる治療成績が報告され可成りの効果をあげている。かかる治療剤として水銀剤を主体とする化学的合成剤があげられるが、他方抗生剤の輝かしい発見に刺激されて、この方面から抗糸状菌剤を見出さんとする努力も払われてきた。オーレオスライシン、トリコマイシンなどがこれであるが、その効果については、必ずしも満足すべきものではないようである。最近、われわれは日本化薬よりかかる製剤の1つとして「パリオチン液」の提供をうけそれを皮膚真菌症の治療に用いたので、その治療成績について述べることにする。

パリオチンは、*Paecilomyces varioti* Bainier var. *antibioticus* によつて産生される、主として真菌類に有効な抗生物質とされている。これは微黄色油状の物質

で、その純粋なものは不安定であるが、有機溶媒溶液中では安定である。

われわれが臨床的に用いたのはそのチンキ剤で、その組成は次の通りであつた。

本剤 1 cc 中の成分：

- パリオチン原液 800 単位
- 塩化ベンザルコウウム 1 mg
- サリチル酸メチル 0.05 cc
- プロピレングリコール 0.2 cc
- 75% アルコール 約 0.75 cc

臨床成績

用法：パリオチン液を1日2~3回、刷毛をもつて局所に塗布せしめた。その際、治療前、個々の症例について局所の糸状菌の有無を検査した。そうしてこれを証

第1表 パリオチンキによる治療成績 (a)

No.	氏名	年齢	性	病名	初診の日時	部位	所見	菌		効果
								鏡検	培養	
1		27	♂	小水疱性斑状白癬	2週	左えき窩	紅斑, 丘疹, 落屑, 掻痒(+)	+		+
2		27	♀	"	4月	左下腿	丘疹, 落屑	+	+	++
3		31	♂	"	1月	右上膊	紅斑, 丘疹, 落屑	+		++
4		14	♂	"	2週	右頸部	紅斑, 丘疹, 落屑	+		++
5		25	♂	"	2週	両えき窩	紅斑, 丘疹, 落屑	+		+
6		14	♀	"	1月	左前膊	紅斑, 丘疹	+	+	++
7		20	♂	"	10日	背部	紅斑, 丘疹	+	+	++
8		28	♀	"	3週	左大腿	紅斑, 丘疹, 掻痒(+)	+	+	++
9		59	♂	"	2月	右手背	紅斑, 落屑, 掻痒(+)	+		+
10		26	♀	"	10日	右頸部	紅斑, 落屑	+		+
11		18	♂	頑癬	6月	臀部	紅斑, 丘疹, 落屑, 掻痒(+)	+		++
12		24	♂	"	3週	"	紅斑, 丘疹, 掻痒(+)	+		+
13		26	♂	"	1.5月	陰股部	紅斑, 丘疹	+	+	++
14		37	♂	"	2月	"	丘疹, 落屑	+		+
15		32	♂	"	2月	"	紅斑, 落屑, 掻痒(+)	+	+	++
16		58	♂	"	3年	臀部陰股部	紅斑, 丘疹, 落屑, 皮膚肥厚, 掻痒(+)	+	+	+
17		32	♂	"	1週	陰股部	紅斑, 丘疹, 掻痒(+)	+		++
18		32	♀	酵母菌性指間糜爛症	1月	右ⅢⅣ指間	紅斑, 糜爛, 浸軟	+		++
19		48	♀	(カンジダ症)	10日	左ⅡⅢ指間	紅斑, 糜爛, 痂皮	+	+	++
20		53	♀	"	1週	右ⅢⅣ指間	糜爛, 浸軟	+		++
21		3	♂	頭部白癬	3週	頭部	落屑, 脱毛(罹患部)	+		+
22		42	♂	爪甲白癬	20年	右趾	爪の脆弱	+		+

第1表 パリオチンキによる治療成績 (b)

No.	氏名	年令	性	病名	初診迄の期間	部位	湿潤型	乾燥型	菌鏡検	効果	備考
23		29	♀	汗疱状白癬	1月	足 趾	+		+	-	刺戟(+)
24		43	♂	"	3月	両 足 趾	+		+	+	
25		44	♂	"	1.5月	"		+	+	+	
26		42	♂	"	1.5年	"		+	+	-	
27		49	♂	"	1月	"		+	+	+	
28		31	♂	"	1月	右 手 掌	+		+	-	刺戟(+)
29		27	♂	"	1.5月	両 足 趾		+	+	-	
30		28	♂	"	4週	右 足 背		+	+	+	
31		47	♂	"	2年	両 足 背	+		+	+	
32		35	♂	"	6月	両 足 趾		+	+	-	
33		45	♂	"	1年	"	+		+	+	
34		31	♂	"	2月	"		+	+	+	
35		28	♂	"	1年	左 手 掌	+		+	+	
36		22	♀	"	1.5月	左趾間 足趾	+		+	-	
37		28	♂	趾間白癬	2週	右ⅡⅢⅣ趾間 左ⅢⅣ趾間	+		+	+	
38		43	♂	"	3月	両ⅡⅢⅣ趾間	+		+	+	
39		33	♂	"	2週	両 趾 間	+		+	+	
40		47	♂	"	2年	"	+		+	+	
41		34	♂	"	1年	"	+		+	+	
42		38	♀	"	4月	右ⅢⅣ趾間	+		+	-	
43		29	♂	"	2月	左ⅢⅣ趾間	+		+	+	
44		31	♂	"	2月	両 趾 間	+		+	+	
45		34	♂	"	1.5月	"	+		+	+	
46		22	♀	"	1.5月	左 趾 間	+		+	-	

明されたもののみを治療対照として選んだ。使用期間は3週間で、その間症状の改善の程度により著効、有効、無効に区別した。尚、これにより臨床所見が幾分好転したようにみうけられても、それ以上症状改善の傾向が見受けられないものは有効の判定より除外した。

また、後述する如き理由によつて、太陽灯、リゾール浴などの併用療法は原則として行なわなかつた。

この基準にもとづいて行なつた治療成績は第1表の通りである。これを総合すると、46例中、有効34例で、有効率は75%であつた。更にこれを各種疾患部にみると第2表の通りである。

即ち、小水疱性斑状白癬では、10例中、著効6例、有効2例、無効2例であつた。頑癬に対しては、7例中、著効4例、有効2例、無効1例で、この2つに対しては効果の差異は殆ど認められないようであつた。

足部白癬では、24例中、著効11例、有効5例、無効8例で、有効率67%であつた。これを各臨床型に区別すると、趾間白癬においては、10例中、著効6例、有効2例、無効2例(有効率80%)であるのに対して、

第2表

	例数	著効	有効	無効	有効率(%)
小水疱性斑状白癬	10	6	2	2	80
頑 癬	7	4	2	1	86
汗 疱 状 白 癬	14	5	3	6	57
乾 燥 型	7	2	2	3	57
湿 潤 型	7	3	1	3	57
趾 間 白 癬	10	6	2	2	80
酵母菌性指間糜爛症	3	3	0	0	100
頭 部 白 癬	1	0	1	0	
爪 甲 白 癬	1	0	0	1	
計	46	24	10	12	74

汗疱状白癬においては、14例中、著効5例、有効3例、無効6例(有効率57%)であつた。しかも、これらにおいては、乾燥型に限らず、湿潤型に対してもこれまでわれわれが日常の治療において慣行しているように、後者に対しては先ずリゾール浴、リバノール軟膏、その他によつて、局所皮膚を乾燥せしめた後、外用薬を塗布せ

しめることをせず、初めから直接外用せしめたものであつた。それは使用にあつて、本剤の組成から刺戟が少いものと考えたからであつた。しかし、第2表から知られる通り、本剤の汗疱状白癬に対する効果には、両者の間に差異を認めることができなかった。

酵母菌性指間糜爛症に対しては、3例全てに著効を示した。その中1例はカンジダ症であつて、培養により *Candida albicans* を証明することができた。

頭部白癬に対しては、1例に有効であつたが、爪白癬に対しては、無効であつた。

副作用 汗疱状白癬の湿潤型2例に、皮膚炎並に増悪をみたに過ぎなかつた。

培養成績：*Candida albicans* の1例の他、7例に猩紅色菌を培養した。

われわれは、バリオチン液（日本化薬）を皮膚真菌症46例に使用して、有効34例、即ち、有効率75%の成績を得た。今迄に公表された治療成績をみると、横山らの87.5%を最高として80%以上の有効率をみているのが、田沼ら（85%）、大森ら（80%）、高橋ら（80.6%）、山本ら（82.1%）であつた。これに対して小堀らは、51%とする低率をあげている。われわれの75%は、谷奥らの70%に近いが、これも湿潤型に対する使用に際して、在来、われわれが行なつたように、この型のものに対して、先ず、リゾール浴、つづいてリパノール軟膏塗布によつて局所の2次感染を除去して、それを乾燥せしめた後に用いれば、更に高い有効率が期待出来るものと考えられる。これをわれわれが在来の治療法に従つて得た他の薬剤の効果と比較すると、2,4,5-メリクロールフェニールカブロン酸エステル、2,4,6-トリブロームフェニールカブロン酸エステル、プテルメルクリチオサリチル酸プテルエステルの混合物からなる強力アスレタンを用いた足部白癬に対する2週間治療の短期治療では有効率74.5%、3週～2カ月間の長期療法では80.5%であつた。本剤による今回の報告も3週間の短期治療であつて、大体これに近いものであつた。更に長期にわたつて使用すると、有効率が上昇してくるかと考えられる。

しかし、本剤にあつては刺戟作用が少く、46例中僅かに2例にこれをみたに過ぎなかつた。何れも足部白癬の湿潤型に用いたものであつた。従つて、前に述べた使用上の注意をまもることは、実際の診療に当つては大切なことと考えられる。山本らは汗疱状白癬の無効7例中、

5例は塗布時疼痛のために使用を中止したものであり、1例に増悪をみている。その他の人々は、何れも刺戟症状が少いことを強調している。

次に、この抗真菌剤の効果を、頑癬、小水疱性斑状白癬など毳毛部に発生するものと、いわゆる足部白癬（趾間白癬、並に汗疱状白癬）に区別するとき、前者に対しては82.7%であるのに対して、後者では67%であつた。この点は、他の報告が両者の間に、これ程著しい相異が認められぬ点と異なるところであつたが、この傾向は他の抗真菌剤においても認められるところである。また、横山らは湿潤型3例に対して、何れも無効であつたとしている。

酵母菌性指間糜爛症3例には何れも有効であつたが、逆に横山らは、本症の2例共に無効であつたとしている。しかも、われわれの1例はカンジダ症で、培養により *Candida albicans* を証明できたが、これに対しても有効であつた。しかし、第3表から知られる通り、バリオチンの抗菌スペクトルはカンジダに対して最も弱いものであつた。

第3表

菌種 (真菌)	最低有効稀釈倍数
<i>Tricophyton interdigitale</i>	160,000
<i>Tricophyton mentagrophytes</i>	320,000
<i>Tricophyton tonsurans</i>	1,280,000
<i>Microsporum audouinii</i>	1,280,000
<i>Microsporum canis</i>	160,000
<i>Epidermophyton inguinale</i>	320,000
<i>Candida albicans</i>	<10,000
<i>Cryptococcus neoformans</i>	640,000
<i>Blastomyces dermatitis</i>	2,560,000
<i>Sporotrichum scheneckeri</i>	40,000

## 結 論

- 1) 小水疱性斑状白癬では、有効率80%であつた。
- 2) 頑癬では、有効率86%であつた。
- 3) 汗疱状白癬では、有効率67%であつたが（趾間白癬を含む）、これは使用方法の改善により、有効率は更に上昇できるものと考えられる。
- 4) 副作用は、46例中2例に認められるにすぎず軽度であつた。この副作用もまた使用方法の考慮により避けられるものと考えられる。

(文献略)